

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 山の唄 : 寮部報 |
| Author(s) | 里見, 建太郎 |
| Citation | 龍南, 253 : 70 - 71 |
| Issue date | 1943-07-20 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/8554 |
| Right | |

はないからそれは炊事書記さんの汚れた腕に一任して、炊事部としては副食物の方へ主力を注いで居る現状である。これとても諸君の期待に副ひ得る程のものでないことは分つて居るが、僅かでも敬虔な気持ちで受けて貰ひたい。何事も自己本位に考へて居ては限りがない。南海の孤島で、寒風膚をつんざく北洋で死闘を續けて居る我等の父、兄、友のことを思へば、皇國民として自ら感謝の念がこみあげてくる筈だ。この気持ちを持續して萬事に處して貰ひたい。

茲に更に一言附加すべきは炊事部の配給係としての新發足である。元來習學寮は名實共に一つの大きな家庭であるが、炊事部はお母さんの役を更に廣く受持つたわけである。パン・菓子・石鹼・塵紙その他日常品一切の配給を一手に引受けて活躍することゝなつた。そこで炊事部の多忙を察して部員を増員して戴いて惣代に改めて感謝すると共に之を一般に報告します。(高木記)

文化部々報

古來素晴らしい文化は多くその逆境に於て生れてゐる。現在の寮生活は吾々の文化的研究に或程度の制約を與へてゐることは確かであるが、吾々はこの逆境に屈してはならぬ。かゝる生活に於てこそ優秀な逞しい龍南文化は産み出さるべきである。この點文化部としても愈々責任の重大なるを痛感する次第であるが、結局は寮生諸君の努力だ。諸君の日々の生活が文化の温床として意義を持つまでにならねばならぬ。一人々々が個性に従つて生活を創つ

て行く、即ち吾々の毎日の生活が、「生活の探求」でなければならぬ。

だから文化部の仕事は唯その助長にすぎない。この方針で文化部は進んで來たし、又今後に進んで行く。

圖書推薦、圖書貸出

讀書批評會、映畫批評會

レコード・コンサート

辯論大會

美術展覽會

圖書購入(豫定)

以上の行事はその現れであるが、諸君のこれに對する反應は充分とは云へない。吾々は度々諸君に不平を洩らして來た。諸君が龍南四ヶ月の生活を更に反省して新に出發されんことを望む。文化に對する情勢と不退轉の意慾もて、一日一日の生活を充實せられんことを。(良那記)

山の唄

三寮知命下 里見建太郎

山が暮れる

五彩の斷雲が、低く
穹窿を這ひ廻る。

その岐れ目の深い遠い碧。

緑の肌の五つの峰が

紫のヴェールを被る。

濃白の自然の乳が

その巔きにのしかより

山は眠りに入る。

永遠に平和の姿に山は眠り

雲が自由と漂泊の子守唄を歌ふ。

山が暮れる

密立した杉の梢の上を

飄々と夏の想ひ運ぶ南の風。

露を結ばぬ山の草が

感傷と浪漫に揺れ、

郭公のたそがれの唄が流れる。

放れの牧牛の迎る稜線の上に

竊竊の夢の金星が浮ぶ。

山が暮れる

去るに當りて

前總代 尾本文之助

寮を去るに當り靜かに過ぎ去りし二ヶ年半の寮生活を反省し、
且つ又寮の現狀を直視する時そこに鬱勃として起つて來る感傷が
ある。寮生諸君に對しどうしても言ひたい止むに止まれぬ氣持に
驅り立てるものがある。一言自分の體驗せる寮生活の實相よりし
て敢て寮生諸君に訴へたい。

高校生活、それは眞摯激烈たる若人の力強き結合でなければな
らぬ。その底に流れるものは飽く迄若人らしき清き報國の至情で
あり眞劍なる、何物にも屈せざる、何物にも妥協せざる強さであ
るべきである。然るに高校の現狀は如何。他校は知らず天下第一
等と誇つて止まざる我が龍南習學寮は如何。

近時世の高校に對する壓迫の強く、吾等の時局認識不足を非難
するの聲の高いは、只に世人の無理解にのみ起因するものであら
うか。吾等のこれに對して執りつゝある態度は果して龍南人らし
きものであらうか。世人の無理解は悲むべきであるが、識者の吾
等の生活の赤裸々なる姿を見る時、果して深き信頼を感じ、邦家
の將來に無限の希望を感じ得るであらうか。吾等ばかりの非難に
對して美辭麗句の限りを盡して高校生活、寮生活を讚美し揚言し
勝ちである。自分はこの態度に對してはその氣持も良く分るし、
この事を責めるのではない。が、他に對する揚言を繰返す中自分
自身過信してしひ、嚴格なる自己反省を怠り己が長所のみ着目

(阿蘇道場にて)